ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「白っ！」

　白が慌てて部屋を出て行った後、少し遅れて雅也も部屋を飛び出す。

　他の皆に来夢音のことを伝えるべきかどうか迷った彼だが、考えが纏まらない内に、体が勝手に動いてしまった。あれよあれよという間に、雅也は白についていく。普段から走り込みは続けているので、足の速さや持続力には自信があった彼だったが、中々白との距離は縮まらない。白の名前を叫びながら廊下を走っているものの、白は来夢音のことで頭が一杯で、雅也の声に気がついていないようだ。

　ものの数十秒程で、白もと雅也は屋敷の外に出た。

「は……白！」

　ほぼ全力で走っていたので、だんだん呼吸が辛くなってきた雅也だったが、そんな彼はお構いなしに白は来夢音が歩いて行った方に向かっていき、走るスピードを緩める様子は無い。

(雅也！　背中に乗れ！)

　いつの間にか後ろにいたルカリオが、そう叫ぶや否や、有無を言わさず雅也を担ぎ上げる。

　そして、白が走っていった方に向かって猛スピードで走り出した。頭はルカリオの背中に向いているので、進行方向が見えず、結構怖いと雅也は思う。

(それとこれだ！)

　走りながら、ルカリオは雅也に何か放り投げる。それも、結構数があった。何とか一つも零すことなくキャッチすると、雅也はそれがモンスターボールであることに気が付く。

　見慣れた自分のモンスターボールもあったが、中には緑色のボールもあった。白の持つ緑色の、フレンドリーボールである。どうやらルカリオが、部屋にいた全てのポケモンをボールに戻し、雅也と白を追いかけたらしい。

「あ……ごめん！　ありがとう！」

(礼ならいい……って、見つけた！)

　そう叫ぶと、ルカリオは思いっきり跳躍し、白の目の前に着地した。

「……！」

　声は上げなかったし、顔も見えないが、はっきりと驚いたのが雅也にも分かった。

「は……白！　やっと追いついた！」

「雅也っ？」

　ルカリオの腕と体の間から、雅也は白を見てピースサインを送る。白にフレンドリーボールを投げると、雅也はようやくルカリオから降ろしてもらえた。

「一体どうしたんだ？　確かに来夢音の姿を見つけた時は驚いたけどさ……そんなに慌てて走るから、追いつくのがやっとだったよ」

「ご……ごめんなさい」

　その一言で、白はハッとする。自分の行動が常軌を逸していた事に、ようやく気づいたらしい。恥ずかしくなったのか、顔を俯かせる。赤くなっているかどうかは、暗闇なので分からなかったが、多分羞恥に悶えていることだろう。

「こっちに、何かあるの？」

「あ……はい。この島には、夜になると暴れだすポケモンがいるんです。屋敷の方に来るわけでは無いので、夜は出歩かなければどうってこと無いのですが……」

「なるほど。来夢音がこっちに来たから、心配になったわけか」

「ええ。お嬢様の向かっていった先は、森があって、暴れるポケモンはそこにいるんです。僕それで、いてもたってもいられなくなって……」

「……まあ、そうだよね。白は執事なんだし、それも当たり前か」

　そう言いながらも、雅也は頬を膨らませる。頼りにされてない感じがして、何かちょっと悲しかったのである。

「……ごめんなさい」

　それを感じ取ったのか、白が頭を下げてきた。

「……僕もついていくからね？」

「……！　ありがとうございます！」

　こうして、二人は止めていた足を再び動かし始めた。

　そして二人は現在、森の中。

「白！　そっちいったよ！」

「はい！　ピジョン、追い風！」

　二人は三匹のポケモンに襲われていた。森に足を踏み入れた途端にこれだ。

　白から暴れだすポケモンが結構いるという事は聞いていた雅也も、まさかここまでとは思っていなかった。

　二人とそのポケモンに襲いかかっているのは、上半身が赤く、下半身が白い、モモンガのようにくっついた鳥の翼をした、まるでプロレスラーのような格好をしたポケモンである。『レスリングポケモン』のルチャブルだ。今三匹のルチャブルは、興奮しているのか、目を見開いて激しい息遣いで雅也達を威嚇している。

雅也や白の胸くらいの高さ程度の身長だが、そこから繰り出される『フライングプレス』という、まるでボディプレスのような技が厄介で、先程から少々苦戦していた。

雅也と白が繰り出しているポケモンは、それぞれフシギソウとピジョンである。ピジョンは白のポケモンで、赤い頭飾りが特徴の、全身が茶色の毛で覆われた鳥ポケモンだ。

ピジョンは、今まさにフライングプレスを仕掛けて空中に飛んだルチャブルを、『追い風』という技で吹き飛ばす。まあ『吹き飛ばす』と言っても、空中での体勢を崩した程度ではあるが。攻撃を妨害されたルチャブルは、そのまま背中から、上手く受身をとって地面に着地した。

この技は本来は自分や味方の後ろから強風を吹付け、素早さを大幅に上げる技だが、白のピジョンはこういう風な使い方が出来るらしい。立ち上がったところを、フシギソウが『蔓の鞭』で弾き飛ばす。しかし、再びすぐに起き上がった所を見ると、あまりダメージは無いようだ。

「フシギソウ、葉っぱカッター！」

　それでも間髪入れずに雅也は指示を飛ばす。白のポケモンは攻撃するのがあまり得意では無いので、ダメージは自分達が稼がなければならないのだ。

　空中に無数に舞った葉っぱが、一斉にさっき攻撃したルチャブルに襲いかかる。全て当たるが、多少切り傷をつくった程度で、あまりダメージらしいダメージになっているようには見えなかった。

　雅也からすれば、白のアシストは『素晴らしい』の一言だった。現に、さっきからフシギソウの攻撃は全て命中している。だが、肝心のダメージがこの程度では、はっきり言ってジリ貧だ。全く、心底自分達が情けない。

　さて、どうする……？

　悔しい思いを必死に抑え、雅也は下唇を噛みながら、必死に頭を回転させていた。